特集 死の現在

揺らぎ始めたのか葬祭

――伝統仏教教団のアンケート調査から――

菅原壽清（すがわら としきよ）

一　危機感をもつ寺院・教団

これまで、日本人の多くは民俗的な習慣と仏教との関わりの中で葬祭を営むことにより、安定した生死観を育んできたし、今も多くの人々は伝統仏教と関わりながら葬祭を行っている。伝統仏教の側でも、葬祭を行うことにより人々の生死観と深く関わり、仏教的な精神世界を広めると共に、その経済的基盤を築いて、地域社会に定着してきた。今日では、伝統仏教のほとんどの寺院は、葬祭によって、その運営が成り立っていると言っても過言ではない。

しかし、近年の急速な社会変動に伴って、葬祭を取り巻く環境や人々の意識は都市部を中心に大きく変化している。たとえばそれは直葬、散骨、共同墓、葬送の自由、戒名問題、葬儀の簡素化など、従来実施されてきた葬送儀礼やその後の追善供養などの伝統的な葬祭とは異なった葬儀形態が出現し、それらの問題がマスコミなどにおいても取り上げられる機会が多くなってきている。また、都市部での変化の影響を受けて、その多くを地域社会に展開してきた伝統仏教寺院の側からも、檀信徒の寺離れ、葬祭産業の進出の問題などに伴って、従来行ってきた葬祭の方法では対処できない変化が起こっており、「文化の中の死」は双方で揺らぎ始めているのではないかと危惧されている。

このような問題に対して伝統仏教教団では、現代の葬祭問題が持つ意味の重大性に気付き、新たな組織を立ち上げて、教義と葬祭、現代社会の問題など、対社会との関係の中で葬祭問題を捉え直そうとする、新たな視点からの調査や研究の気運が起こっている。

一般に、葬祭などの葬送儀礼は、死者を葬るというだけではなく、人々の精神世界に関わる問題、特に霊魂の死と再生の儀礼を含む文化的宗教的なものでもあり、また死者が生前に関わった社会的なつながりに対処し再構築するなど、それらが相互に関わる多様な問題を含んでいる。それだけに、葬祭問題を考えていくとき、多面的で基礎的な研究が求められる。[1]

葬祭に関する研究は、これまで隣接する民俗学や社会学、人類学などの諸分野において、その多くが研究されてきた。たとえば、民俗学などの分野では仏教の側よりも、むしろ葬祭を担ってきた人々の民俗的な習慣などに注目して研究が行われてきたし、また宗教社会学などでは、伝統仏教と新宗教、先祖祭祀の問題、さらに文化・社会人類学などでは葬祭を支えてきた人々の文化や社会の問題などに関心をもってきた。しかし、伝統仏教教団の側では、多くの教団がそうであったように、教義の側、信仰の立場に立てば、葬祭などは本来の仏教ではないという考え方が少なくなかったし、これまで伝統仏教の内部では、葬祭問題について記述した記録や体系的研究は必ずしも多くはなかった。

葬祭問題が注目されている現在、寺院活動の中心が葬祭にあるという現実の姿を認めつつ、教団レベルで葬祭をどのように位置づけ、檀信徒やさらには多くの人々に、葬祭問題をどのように応えてゆけばよいのかが問われている。なかでも、こうした問題に応えるためには、仏教と民俗（葬送習俗など）、あるいは民俗信仰（霊魂観やシャーマニズムなど）との関わり、また新宗教と檀信徒（かつての「檀家」）、さらには葬祭産業と寺院との関係など、それらの実際を把握するための本格的な実態調査やアンケート調査など、総合的な調査による基礎的データの収集と蓄積を行うことは、欠かすことの出来ない重要な作業であると思われる。[2]

ここでは、一伝統仏教教団（曹洞宗）のとり組みでは

あるが、葬祭に関する基礎的データを収集することを目的に、寺院住職と檀信徒を対象としたアンケート調査を試みた。そこで、特定の宗教集団（教団）から見た事例として、それらのアンケート調査を一つの手がかりに、ここでのテーマについて、その一端を報告してみたい。

二　葬祭の位置づけ

これまで、伝統仏教教団の多くは歴史的な変遷過程の中で、葬祭や祈禱などを取り込みながら複雑に展開してきた。それだけに複雑に絡まった現実の教団の姿を捉えていくには、それらの絡まりを解して、幾つかの要素に分け、それぞれの関係を点検し、再構成していく作業が必要であると思われる。以下では、葬祭に関するアンケート調査を実施するに当たり、葬祭を仏教の中にどのように位置づけるのか、作業仮説として、次のような関係構造を念頭に置きながら、アンケート項目とそれぞれの選択肢を作成したので、その枠組みの構成に触れておきたい。[3]

まず、枠組みであるが、それは一般に宗教集団を構成している文化的・社会的な要素として、およそ図1の実線部分のような関係として捉えることができよう。ここで示す、①は本尊（曹洞宗では一仏両祖）など、直接目には触れることができない潜在的な観念・文化のレベルに位置する観念の体系、②③は文化と社会の両レベルの接点における宗教者とその信仰者・信者との人的組織の体系、④は仏像、宗教的施設など直接目にすることのできる顕在的な社会のレベルに位置する象徴の体系、⑤は文化と社会の両レベルの交点において実施される具体的な教義の実践（曹洞宗の場合は坐禅）や葬祭などの宗教儀礼に関する行為の体系である。そして、これらの集合体が、仏教など特定の宗教集団（教団）ということになる。

仮に、こうした枠組みで伝統仏教教団を捉えていくとすれば、多様な関係からなる教団の実際の姿を描き出し、それらを全体として把握していくことが可能となる。実際に、教団（曹洞宗）は他の伝統仏教と同様に、複雑で多様な構造からなっている。それは、仏教（禅）としての本来のあるべき姿に対して、実際には長い歴史の過程

において、葬祭儀礼や現世利益的な信仰をも取り込んで、現在に至っているからである。今では、教団のほとんどの寺院では葬祭を実施し、そこから得た布施によって寺院経済の多くを支えているし、また稲荷・天狗・龍神などの現世利益的信仰、さらには観音や地蔵などの信仰も、当面する人々の宗教的欲求を充足する方法として、多くの人々を寺院に引きつける要素となっている。

こうした多様な要素をもった教団という視点から、教団の各寺院が実施する葬祭を捉えてゆこうとすれば、そこには建前としてのあるべき仏教と実際に行われている葬祭、つまり檀信徒の葬祭儀礼という二重構造としての姿を捉えることができる。このように、伝統仏教が葬祭儀礼と重なった多重な構造をもった状態にあると理解するとき、それぞれの関係は図の実線部分と点線部分に示すような関係として捉えることができるであろう。

この図では、仏教と葬祭儀礼に関わる要素が重なり合っていることが理解されよう。それは、①は教団と仏教徒（檀信徒）の信仰対象である本尊と先祖（ほとけ・ホトケ）とが重なった状態を、②は仏教者であると同時に
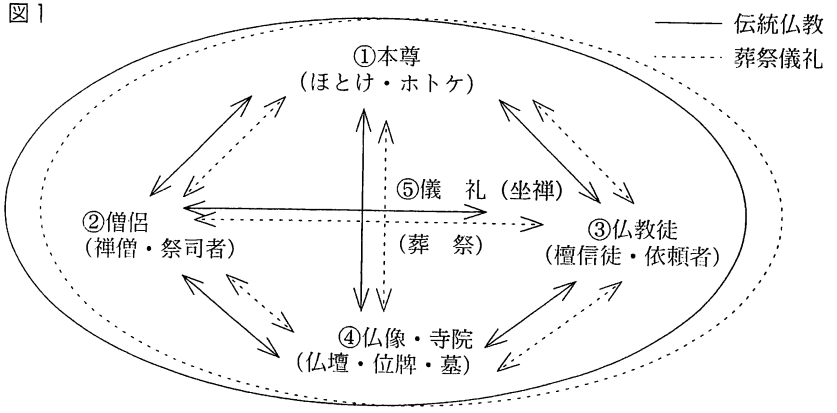
図1